

学校だより 7月号

令和8年6月30日



横浜市立義務教育学校

緑園学園

RYOKUEN COMPULSORY EDUCATION SCHOOL

横浜市泉区緑園五丁目28番地 前期課程 ☎045 (811) 6710 後期課程 ☎045 (811) 6030

記憶と記録

副校長 杉山 学

携帯電話が普及する前、親族や友人の連絡先はもっぱら固定電話でした。電話番号は語呂合わせで覚えるもの、という感覚があり、「いいくに(1192)つくろう鎌倉幕府」の調子で、身近な人の番号を頭に刻み込んでいた記憶があります。やがて携帯電話が広まり、電話帳機能が当たり前になると、その習慣は静かに消えていきました。番号を覚える必要はなくなり、名前を選べばすぐにつながるようになりました。便利になった一方で、いつの間にか何かを手放していたことに、あとになって気づくこともあります。

さらに携帯電話はインターネットへとつながり、私たちは日々、膨大な情報に触れるようになりました。その中で増え続けたのがパスワードです。しかし、それすらも今ではスマートフォンが管理してくれています。複雑な文字列を覚える代わりに、機器に任せることが当たり前になりました。こうして見ると、便利な機器や機能は、私たちの生活を効率よく支えてくれています。しかしその一方で、「覚える」という営みが、少しずつ私たちの手から離れていっているようにも感じられます。

同じことは、日々の買い物にも見られます。通販サイトでは欲しいものがすぐに手に入り、購入履歴には過去の選択がすべて残されていきます。「そういえばこんなものも買った」と振り返るとき、その履歴は自分の関心や行動の軌跡でもあります。また、履歴をもとに新たな商品が提示される仕組みは、私たちの選択をさらに広げていきます。こうした日常を振り返ると、「記憶」と「記録」は対立するものではなく、互いに支え合う関係にあるのではないかと思えてきます。記録は単なる保存ではなく、必要なときに記憶を呼び戻す手がかりとなっています。

とはいえ、すべてを記録に委ねることが当たり前になったとき、私たちの中にどのような記憶が残っていくのか——その問いもまた、これからの時代を考える上で大切なのかもしれません。だからこそ、便利な機器を活用しながらも、自分の力で思い出そうとする時間を意識的に持つことが、これからの学びや生活の中で重要になっていくのではないのでしょうか。もっとも、その「考える時間」でさえ、“スクリーンタイム”に几帳面に記録されています。振り返って「今日はよく考えたな」と思うとき、頼りにしているのが自分の記憶ではなくその記録であることに気づき、少しだけ姿勢を正したくなります。